

# 転生サバゲー青年と野 クルとの日々

アニオタな小説収集家

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

毎週末、サバゲーに参加する高校生九重和也は、突如バイクの転倒事故で16歳という短い人生を終えてしまう。しかし、女神により新たな生を得てゆるキャン△の世界に降り立った。そこで始まる新たな生活、幼馴染の志摩リンや野クルメンバーたちと送る生活の行方は、

# 目次

第1話	1
第2話 転生してから16年そして出会	
い	4
幕間 和也のサバゲー	14
第三話再会	19
第四話なでしこ鍋と雑炊と謝罪	25
第五話 サバゲーなしのソロキャン	
阜	34
第六話	44
第七話 味噌焼きおにぎりと帰宅	49



# 第1話

## 第1話

俺は、九重和也どこにでもいるただ、サバゲーによく参加する16歳の高校生だ。毎週末には、サバゲーフィールドまで取りたてのバイクに乗って通っている。今日もいつものようにバイクにまたがり、山中のサバゲーフィールドに向かっていた、ここで俺のとても短い人生は終わりを告げた、、、視界は、赤くぼやけている。一目でスリップして転けた事故だと自覚すると、今まで抑えていた気持ち勢いよく溢れ出てきた。

「俺、まだやり残したことがたくさんあるのに、、サバゲー、バイク、キャンプだってあまりできてないのにこのまま死ぬのか？いいや、よくないまだやりたいことがあるから!!!」

だんだんと、体の感覚がなくなっていく、もう立つ力も残っていない、そこで俺の意識は完全に、途切れた、、、、、、、、、、

「起きてください、九重和也さん。」

何かに呼ばれて目を覚ますと、そこに女神がいた。。。

「俺は、確か死んだはずじゃないか？」

「はい、確かに貴方は亡くなっています。しかし、貴方の人生はとても短すぎます。よって好きな世界に転生させるといふ処置を取らせていただきます♪」

「好きな世界？なんでも良いんですかアニメやゲームの世界でも？」

「はい、世界を決めてもらった後にいわゆる転生特典を選んでもらいます」

「和也さん、貴方は生前キャンプやサバゲー、バイクなどアウトドアがとても好きでしたよね？なら、ゆるキャン△という世界は、どうでしょうか？」

「ゆるキャン△？どういう世界ですか？」

「ゆるキャン△とは、キャンプを題材としたアニメで、これを見てキャンプを始める人が多いほど沢山の人に愛されているアニメですよ。」

「なら、ゆるキャン△の世界でお願いします!!」

「では次に、転生特典ですね」

「どんなものでも構わないですよ」

「では、凡ゆる武術などを問題なく扱うことができる肉体と環境、天才的な頭脳、器用さ、凡ゆる乗り物乗りこなせることが出来る力とバランスでお願いします」

「わかりました。では、転生させる場所を登場人物の志摩リンの近所にして、互いの家で交流があり、リンとは幼馴染としておきましょう」

「何から何までありますがどうござります!!この恩は、忘れません。本当にありがとうございます」

いました女神様！」

「では、行ってらっしゃいませ！よき人生を送ってください☒

貴方の人生に幸あれ！」

また、俺の意識は沈んでいった、……………

ここから、俺の新たな物語が始まる!!

## 第2話 転生してから16年そして出会い

### 第2話

女神様に転生させてもらってから、16年の月日が流れた、、、、

「いろんなことがあったなあ〜」

本当に色んなことがあった、バイクの免許取ったり、サバゲーとソロキャンしたりと、凄く充実した日々を送っていると思う。

年中バイクでサバゲーをしに遠出したりして、今年も冬がやってきた、

今年も去年と同じく、ソロキャンしながらバイクでサバゲーでもいこうかな、、、、

「和也」

「どうした？リン？」

「いや、今週末二人で本栖湖でキャンプしないか」

どうしよう、、サバゲーした後から本栖湖のキャンプ場に合流だったらキャンプできるけど、聞いてみるか、

「サバゲーした後から現地でもいいか？」

「ん、わかった」



「俺もソロキャン道具を持ってサバゲーして、急いで向かうからな」

リンとキャンプか、今年はじめてやるなく、年中サバゲーと武術とかしかやってないから、すごく楽しみだ！

「和也は、サバゲーのどこが楽しいの？」

「楽しいか、サバゲーは自然の中で銃を持ちながら敵プレイヤーを倒すのが楽しいかな」

「へえ〜」

「って、リンにサバゲー装備見せたこと無かったけ？」

「あるよ、結構すごい数のものがあつたのを憶えてる」

「まあ、色々サバゲー装備は持ち物があるからな」

まあ、同じ趣味を持つ高校生は少ないし近くにサバゲーフィールドがないのもあるからなあ〜

「そろそろ図書室閉館時間じゃないか？」

「確かに、もう閉めなきゃな」

「じゃあ、一緒に帰るとするか」

リンと帰るのも、結構楽しいしな



「出発するぞ」

右よし、左よし（\*・・・?・・・）?? 行くぞー

「ここから本栖湖まで結構あるな、何キロだ?、87キロか、まあ頑張りますかね」  
急ぐぞー、急げ急げ

和也 side out

リン side

キャンプ場着いた、って絶対風邪引くな、まあいいか受付しよ、

「一泊お願いします」

「では、ここに名前と連絡先を記入してください」

「はい、では明日午前10時にチェックアウトをお願いします。薪は、林の中にあるものを使ってください」

「ハイハイしよ」

15分後、、出来たな、読書でもするか、、、、、、

ヒューヒュー、、風、さむい、だが焚き火するのは面倒くさいし、服に臭いがつくし、  
火の粉で服に穴空くし、、、、ヒューヒュー、、焚き火するか、、寒、

焚き火、、顔が乾燥すると分かってても、この暖かさはいい。

そろそろ日が沈み始めたな、、、 あいつはまだ来ないか？

「おーーい、リンー、来たぞー」

やつと来たか和也、

リン side out

和也 side

よーー着いた、、、 ってこいつ、こんなところで寝てて大丈夫か？ まあ寒くなったら起きるだろ、受付しに行かなきゃなく、、、、、、、、

よし受付完了！さてと、リンは何処かなく？あれじゃないか？あれやん、よっしゃ行くぞー

「おーーい、リンー、来たぞー」

和也 side out

「おーやつてるなー、俺もテントを張りますか、リンの隣にテント張ってもいい？」

「いいよ、ここ空いてるから」

「せんきゅ、助かるわ、してもサバゲーとバイクで疲れたわくでも楽しかった」

「今日は、どこまで行ったの？」

「今日はね、静岡県裾野市今里って所のTHE TRENCH(ザ・トレンチ)に行ってきた」

「静岡、だから遅かったのか」

「これでも、急いだんだけど静岡から本栖湖までは少し無茶だったかな、、、」笑  
「よしよし、テント設営完了!」

それよりも周りが、暗くなり始めてるから料理を始めますかね〜

「今から野菜たっぷりポトフでも作ろうかなと思うけど、もう夕食食べちゃった?」

「いや、まだ食べてないよ。これから食べようかなって思った所に和也が来たから一緒に食べようかなと思った」

「OK、じゃあこれから作り始めるか」

まず予め切ってきた野菜を鍋に入れ炒めます!ジュージュー

そして、水とコンソメを入れてしっかり煮ますゞ(ー、ダーグツグツグツ

完成まで1分ほど待ちます! (ー) (ー) (ー) チョコン

コンソメのいい匂いがしてきたので完成です! (\*?、\*) ジュルリ

「リン、お待ちどうさま野菜たっぷりポトフです♪コンソメが野菜に染みでて美味しいぞ!なんと言っても暖まるこの季節では、定番だぞ〜」

「では、食べようか!」

『頂きます!!』

うまうま (o、艸、)、味がしつかりと染みとる、野菜の甘みも美味すぎる

・\*・・、(\*、▽、)ノ・\*・

そうして、俺とリンは黙々と食べ進めた。

そうしてリンが、

「ちよつとトイレ」

「OK、焚き火見ながら待つてるわ〜リン、気をつけるよー!」

そろそろ、今日使ったライフルを点検&整備しますか、、

ここをこうしてマガジンを外して、玉が入ってないか確認して(???)? ヨシ!スコー

プも確認してつと

後は、玉が通るパイプをきれいに拭いて、「ギャーギャアアアア——」「まつで

よーオオオ」

え、、え?

「ぎゃあー——銃を持つてるうううう」???(w。(D。)(w

「まあまあ、落ち着いて、一つ聞いてもいいか?まさかだだけ帰れなくなったの?」

(「?」?「」)こくん

「そうか、仕方がないな、まずは、インスタントで悪いけどカレー麺食べなよ。ずっと



(なにやっつてんだこいつ)

その後、……………

「こんのバカ妹!!携帯は持ち歩かなきゃ意味がないでしょうが!!」

「ごめんなさい、お姉ちゃん」

「はやく車に入れ!!豚野郎」

「やめてえー、カレー麵出る……………」

俺とリンはというと ( ) ( φ ( ⊙ □ ⊙ ; ) φ ( ( ( φ ( ⊙ □ ⊙ ; ) φ ( (

「うちのバカ妹が本当にお世話になりました。これはお詫びです」

(カレー麵がキウイに化した)

「おやすみなさい、風邪ひかないようにねー」

「待ってー、これ私の番号、今度はキャンプしようねー」

そうして、なでしこは車に乗って帰っていった、

キャンプ組二人は……………

「リン、これどう思う?」







「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ  
 「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ  
 「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ「ヒ、ヒットー」「ヒットー」「ヒットー」「あゝ、ヒットー」

そうして、相手陣地のプレイヤーが奥の方へ戻っていく、

「とりあえず (≡▽≡\*) 3 ヒットキター (。▽。 ) ー!」

まあ、相手陣地プレイヤーが多いから気をつけなきやばいからなあゝ、ゝゝ、つて  
 言ってるそばから来てるんだが、? (。□。?)

射撃音が聞こえるもん、? || ??? (??) ?? ☒ ? ( ) / ヒュンヒュン、真横、玉 が通っ  
 ていったんだが、

反撃じゃあ!!!! 「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ  
 ダンツ「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ「・ω・」ダダダ  
 ダダダダダダダダ、

「\ ( , ω ) / ウオオオオオアアアアー——ツツツ!!!!」

「き、きみ俺も援護するぞ!!」 「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ「・ω・」  
 「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ「・ω・」ダンツ  
 「ダンツ」

「ありがとうございます!、十一時の方向に六名捕捉!!」





「いやいや、お兄さんの援護があったから結構前の方まで進めましたよ！」

「こつちもありがとう！僕は、大学生で二週間に一回はこのフィールドに来るんだ（ーハ）」

「そうなんですか!?俺は、高校一年生で毎週末色んなフィールドで一人プレイしますよ」  
「そうなんだねって、きみの各フィールドで騒がれてる高校生プレイヤーだったの?!?!」

「おいおいマジかよ、スゴー（”” 艸””）ーイあの高校生やばすぎだろ、あれが噂の  
!?

「騒がれてるって?」

「知らないの?!きみ、ベテランでも知らないところから急に撃たれたりしたって話とか、  
何より、ヒットを取った数が達人ばりだって聞いているよ、だからあんなにうまかった  
んだね!」

うそん（ハハ）、そんなに目立ってたのか、ってか情報網凄すぎるんだが、、

「まあこれから何処かで、また、あった時は皆さんよろしくお願ひしますm（ー）（ー）m」

そして、結構楽しいサバゲーを楽しんだ和也だった

## 第三話再会

## 第三話

今日も、授業が終わった。リンでも誘って帰ろつかない。さてさて、図書室に行かなきゃな、確か、リンは図書委員だからな。

いざ、図書室へ——

1分後

着いたぜ、じゃあ入りますかね、

「リン、来たぜ。一緒に帰ろって斉藤もいたのか」

「見てみて、リンのクマさんヘア」

「おお、よく出来てるなあ」

「リンは、さつきから何で窓を見てるの？」

「あ、野外活動サークルか。ってこの間の迷子になってた子、同じ学校だったのか」

。！

「うん。さつきからテントを設営しようとしてるのを見てる」

「あのテントって激安テントじゃないか？大丈夫かな？折れる気がするよ」

バキ、(。／。D。)／(。／。D。)／(。／。D。)／

「ほら、言わんこつちやない」

「あーなつたらどうするの?」

「メーカーに送って修理してもらうか、こんな応急処置用のパイプをこうすれば一様大丈夫」

「パイプってこんなの?」

「いや、なんで持つてるんだよ」

ほんとになんぞ?」

「そのの落し物箱に入ってたよ」

ここの図書室、そんなものまで落ちてるのか、…、

「渡しに行つてあげなよ、リン」

「斉藤、リン、こんな嫌そうな顔してるから無理そうじゃないか?」

(1111? ω?) (1111? ω?) (1111? ω?) (1111? ω?)

「わかつたよ、リンはここに居て、私と和也で行つてくるよ」

「しようがないか、よし斉藤行くぞー」

移動中、…、…、

「君たち、少しテントを貸してみな」



「は、はい、」

これをこうして、しっかりと固定してと、これでよし

「はい、どうぞ。応急処置だがこれでひとまずは大丈夫だろう。しっかりと注意してテントは、扱うんだぞ」

「和也ありがとうなあ〜」

「いいよいいよ、犬山。図書室から斉藤やリンと見ていて、あたふたしだしたのを見えたから来ただけだし」

「わざわざ、ありがとな九重」

すると、なでしこが近づいてきて、

「あー、銃の人」

「銃の人？」

あー、説明してなかったわ、、、

「久しぶりだな、なでしこ。あと俺は、銃の人じゃなくて九重和也っていうんだ。よろしくな!!」

「よろしく、和也君」

いきなり名前呼びなのは、人懐っこいってことか？

「そして、あそこにいるのが幼馴染こと、しまりん。「しまりん？」志摩リンだ。」

「リンちゃんっていうんだ。リンちゃんーん。このまえはありがとー」

いや、リン睨んでくるな。しょうがないだろ、どっちみち斉藤が言うと思ったから言ってもいいかなあと、そうやって、リンとアイコンタクトで話す。

あ、なでしこが窓に激突した、、、痛そう、なんか、リンに言ってるなあ、つてリン露骨にいやそうな顔を浮かべてる、、、たぶんキャンプ関連なんだろうけど、

あ、なでしこがこつちにきた、

「和也君、野クルに入らない？」

勧誘か、でもなー、リンは入ってなきそうだし、サバゲーの時間がなあ、

「いや、やめとくよ。ごめんね。」

「そうなんだ」

やばい、すごい落ち込んでる。耳としっぽがあつたらしよぼんとしてるだろうな、

「ごめんなあ、俺、週間になってるサバゲーがあるから」

「サバゲー？」

「そう、銃で撃ちあう野外とか屋内でやる競技のことだよ」

「へえ、そういう競技があるんだ」

「そういえば、九重はサバゲーやってたな」

「それなら仕方がない」

「すまん。キャンプに行くくらいだったら、たぶん大丈夫な日があると思うけど」  
「わかったー」

その後、、、、

「じゃあ、リン帰るか」

「そうだね」

「今日、野クルに勧誘されたよ。リンの方は？」

「断ったよ、一人でキャンプする時間がなくなるから。和也は？」

「俺もサバゲーがあるって言って、断った」

「まだ、俺たちは難しいもんな」

「うん」

「って話しているうちに、リン家に着いたか」

「じゃ、また明日」

「また明日、リン」

俺も帰りますか、にしても野クルか、考えてみるか、リンが入るタイミングか、野クルメンバーと仲良くなってからだな、

明日も、頑張っていくぞー  
、  
おー

次回へ続く、……………

# 第四話なでしこ鍋と雑炊と謝罪

## 第四話

俺は、またサバゲーフィールドに来ている。。。。

そういえばリンもソロキャンプに行ってるんだっけ？

聞いてみるか、。。。。。

「リン、今日は何処まで行ってるの？」

「富士山の目の前の麓キャンプ場ってとこ」

「あそこか、結構綺麗に富士山が見えるよな〜（＊・？・＊）」

「そうだな」

ホントに綺麗な所だからな、麓キャンプ場は。今も思うけど、リンってすごくキャン

プ場を選ぶセンスがあるからなあ〜

「よし、楽しんで来いよ〜（ω・）ノシ」

「うい」

これでよしと、。。。おっともうすぐ第二戦目やるのか。準備しなくちやな、今日は日帰りのつもりだったけどリンのどこでまた、キャンプしようかな〜、ソロキャンプ道具

は、バイクに付けて来ているからな。そうだ！聞いてみよ

「リン、俺も夕方くらいにそっちに行ってもいいか？」

「いいけど、キャンプ道具あるの？」

「あるよ。念の為に持ってきてるんだ」

「そう、なら来てもいいよ」

「マジ？ありがとう」

よし、帰りにスーパーでもよって食材買お。雑炊にしようかな、久しぶりに食べたくなったから、そうしよ。そのために体力温存してこう！

数時間後、俺はバイクを走らせていた。。。夕方の山ん中って毎回思うけど不思議だな

「おっ、もうすぐ着きそうだな」

連絡を念の為にするか、

「リン、もうすぐ着く」

「分かった、今こつちになでしこが来てる」

「なでしこか？この前の野クルの件で謝罪しなくちゃな。なでしこに俺が来ること伝えておいて頼む！」

「了解」

リン side

「なでしこ、和也がこっちにもうすぐ着くって」

「和也君が？」

「サバゲーした後にキャンプしたくなったらしい」

「へえー」

「あと、なでしこに謝罪したいって言ってた。野外活動サークルに誘ってくれたのに断ったから申し訳なかったって」

「そうなんだ。リンちゃんも和也君も野外活動サークルに誘って、断られた後に、あおいちちゃんに言われたんだあ。二人ともそれぞれの時間が好きなんだよって。だから、ごめんね」

「いいよ。私も和也も申し訳なかったし」

「おーい！リンとなでしこ」

「来たみたいだよ」

リン side out

「なでしこ、この前はほんとにすまなかった」 < ( ) >

「いいよいいよ。私こそごめんなさい」

「よし、暗い話はやめて、二人ともまだご飯食べてない？」

「食べてないよ」

「そっか良かった」εー(∇、;) ホツ

「なでしこのその荷物は、もしかして全部食材？」

「そうだよー」

「何を作ろうとしてるの？」

「鍋だよ」

「ほんとに偶然だな、俺はメにもなる雑炊をやろうかなって食材を多めに買ってきたんだよ」

「だから、なでしこの鍋の準備を手伝うよ」

「ありがとう」

「こちらこそ」

10分後、……………

「なでしこ、もう鍋良さそうじゃないか？」

「ホントだね。それじゃあいくよ、じゃーん!!」

「真っ赤だ!」

「担々餃子鍋! そんなに辛くないから心配しないでいいよ」



「たーんとお上がり」

「それじゃあ、いただきます。」

「いただきます」

「うまい」

「どうじゃ、体の芯から温まるじやろ」

田舎のおばあちゃん、気に入ったのか。

「あのさ、改めてごめん」

「なんかあったっけ？」

「サークル誘ってくれたのに、いやそうな顔して」

「私もなんだかテンション上がってて、無理に誘っててごめんなさい」

「また、やろうよ。まったりお鍋キャンプ。そこで、気が向いたらみんなでキャンプしようよ」

「うん」

「わかったよ」

「つていつても色々キャンプ道具揃えなきゃいけないけど」

「俺もなでしこたちとキャンプできるように時間作るよ」

「うん」

「おつ、みんなまだ食べられる？つて無理そうだな」

「雑炊は明日の朝ごはんに作ってやるよ」

「うん、よろしく」

「まかせろ」

「そろそろ、寝るかな」

「二人ともおやすみ」

### 次の日の朝

「ふあーあ、つとよっし、やりますか」

朝によさそうな感じにするか、

まずは、お米を水に入れた鍋に、入れ火にかけます。お米が柔らかくなってきたら、野菜などの具材を入れ煮詰めます。そしてある程度、形が出てきたらしっかりと混ぜて、味付けをします。さらに、数分待ちます。

「そろそろだな。いいにおいだ」

うまそうにできた。さつき、なでしこがリンのテントに入っていったから、二人まとめて起こすかな、……………

失礼して、

「リン、なでしこ起きろ！朝ごはんできたぞ！」

「和也おはよう」

「リンこそおはよう!!」

「なでしこ、起きろ! っただめか。なら、ごはん食べるぞ」

「うん、和也君おはよう」

「はい、おはようさん」

十分後、

「「いただきます」」

よかった。自分で食べててもおいしいが、ほか二人はどんな反応だ?

「おいしい〜」「うん、おいしい」、、、、φ(\*?0?)

「「ごちそうさまでした」」「お粗末様」

「そろそろ、片付けして帰るかな」

「そうだね」

三十分後、

「じゃあ、学校でね〜」

さてと、俺は急いで帰らないと、

帰ったら、このバイクを洗車とかもろもろ点検しなくちや。

ふー。つかれた。。。。

「おつ、帰ってきたか」

「ただいま。父さん」

この人は俺の親父で九重勝人。元自衛官。今は狩猟をやっていて、たまに二人や全員でサバゲーをしに行く。

「おう、お帰り。母さんが急に和也がキャンプするって言うから、心配してたぞ」

「いや、リンがキャンプしてるって言ってたし、そのキャンプ場がサバゲーフィールドから近かったから」

「なら仕方ないな。それでこれから、なにすんだ？」

「これから、愛車のこいつを洗車とかしようかなあ〜と思うけど」

「そうか、なら父さんも一緒にバイク整備やろうかな」

「じゃあ始めるか」

タイヤを洗って、車体も同じく洗い、水滴をふき取って、あと、ワックスで仕上げて。。。。

「つて出来た。なかなか一人でやらないけど出来たよ。父さん」

「おお、成長してるな〜」











父さんと話していると、不意にドアが開き、母さんが出てきた。

「和也、お父さんにも言われたかもしれないけど、気を付けて行ってくるのよ」

「分かったって。油断せずに運転するからさ」

「連絡は、こまめにするのよ。何かあったときに気が付かないから」

「じゃあ、父さん、母さん行ってくるよ」

そう言って、鍵を捻り、バイクのエンジンをかける

「行ってくるー——」

そ　う　し　て、　俺　は　岐　阜　ま　で　出　発　し  
た、・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

勝人&あかり side

「行ってくるー——」

そう言って、俺たちの息子はバイクで走りだしていった。

「あかり、大丈夫だよ。和也は何かと強いし、俺たちの知識や技術を小さいころから覚え、実践していたし、何も遠出するのが今回初めてじゃないだろ」

そう言って、隣で心配するあかりに話しかける

「分かってますよ勝人さん。分かっているんですがどうしても心配で、……………」





そうしてすぐ、定食屋さんが見えたので、バイクで駐車場に入る。

「ふうっと、疲れたけどまだまだ目的地は先だからな。このまま行くと着くのは夕方近くなるだろうなあ」

「そんなことより、飯だ飯」

そう言いながら、定食屋に入る、

「いらつしやいませー」

そう言われ、カウンター席につく、、、店内を見回す、なんとも和風な雰囲気だ、気持ち安らぐ、、、

メニューつと、俺はメニューを開く

魚定食と肉定食の二つがあった、、、、、、、、、、

どっちをとるべきか？肉？魚？これからの運転を考えるとなあ、、、、、、、、つて両定食に肉か魚をつけることもできるって書いてあるじゃん。決めた、

「すみません」

「はい、ご注文は何にしますか？」

「はい、魚定食のさばの味噌煮に生姜焼きをつけてください。以上で」

「分かりました。ご飯は小盛り、中盛り、大盛りどれにいたしますか？」

「大盛りでお願いします」

「では、お待ちください」

よし、こういう定食屋の定食は絶対うまいに決まってる。。。。。

「お待たせしました。さばの味噌煮定食と生姜焼き、ごはん大盛りです。どうぞお召し上がりください」

うまそう、、、味噌のいい匂い、食欲がそそられるな

「では、いただきます」

まずは、さばの味噌煮から、、、うまい、、、ナニコレ、すっごいおいしい、感動だあ  
疲れているかいら、余計おいしく感じる。次は生姜焼きつと、これも絶品だな

「うまい、うますぎる」

そうだ、父さんと母さんに連絡しなきゃ

家族ライングループ

和也：岐阜県に入ったー

勝人：それはよかった。なかなか連絡

してこないから心配したんだぞ

今、何しているんだ？飯か？

和也：うん。定食屋に入ってさばの味

噌煮定食と

生姜焼きを食べてる

勝人：おお、うまそうじゃないか!!

和也：めっちゃうまい。食べた瞬間びつ

くりした

あかり：和也、なかなか連絡しないから心配したわ

でも、ほんと無事に岐阜県に入れてよかったわ

今ご飯なら、これからの運転、気を付けるのよ

和也：わかったー

和也：安全運転で参ります!! O W O

つとこれでよし、食べ終わったことだし、ここから先も頑張りますか。

「ごちそうさまでした」!!!!

「ありがとうございますました!!!!!!」

俺は定食屋を出て、、バイクのエンジンをかける

ブルうううううううううううう

「よし、頑張るぞー」

!!!

次回に続く!!!

## 第六話

腹ごしらえが終わり、今回の目的地『亀淵オートキャンプ場』に向かっている、、、  
因みに今は、岐阜市の町中を走っている。

「風が気持ちええ〜。やつぱり〜飯を食べたから元気が出てくる」

ふと考える、岐阜って味噌がおいしかったはずだと、

「味噌を使ったキャンプ飯でも作りますかね〜。でもそのためにはスーパーに入らなきゃ」

俺はすぐに行動に移しスーパーに入った、、、、、、、、

「えーっと、味噌、味噌」

そう言いながら、味噌のあるコーナーを探す。。。

「あつた。これで何を作ろうか、、、味噌鍋とかめっちゃおいしそうだし、今の時期は体が温まるような〜飯がいいよな」

ふと、こんな考えが脳裏をよぎった、、、、、、、、、、、、、、、、、、

「〜飯と味噌で焼きおにぎりもいいんじゃないかと、、、、、、、、、、、、、、、、、、



「よし、今回のキャンプ飯は味噌鍋と味噌焼きおにぎりにしよう!! 焚き火台とコンロ持ってきてるし」

俺はすぐさま、鍋の材料などを買い物かごに入れて、会計をするためにレジへと向かう、

.....

「いらつしやいませー。レジ袋はご利用ですか？」

「はい、お願いします」

「では、お会計は1847円になります」

1847円か、結構いったなでもおいしいもののためなら仕方がない、俺はそう割り切る、.....

「1847円ちょうどお預かりします。」ピピピピガシャン「こちらレシートになります。ありがとうございますましたー」

「ふー、買った買った。これで明日の朝と今日の夜は大丈夫だな」

店を出てから、無意識にそんなことを口に出す

「そういえば、あと何キロでつきそうかな？もう結構暗くなり始めてるからな.....えつと、.. あと24.2キロか、ぎつと五十分くらいか？まあ、どうにかなるさ」

そういつつ、エンジンをかけ発進した.....

数十分後、……、

「案の定、亀淵オートキャンプ場までの道のりが暗く感じるのは、木々のせいだろうか」  
そう、日が沈みかけてきているために結構暗いのだ、……、

「でも、あと二キロを切ってるからすぐつくだろうって言ってるそばからついたな」

すぐに、バイクを駐車場に止め、チェックインをすまし、テントの設営を始めた、……  
「結構きれいな場所じゃないか？写真よりも」

「よし、テントの設営が終わったから待ちかねてるキャンプ飯を作り始めるか」

今日の晩飯は味噌鍋です。正直なところ、両方食べようかなと思ったが、焼きおにぎりは、朝に食べたいなと思ったため、今夜は味噌鍋だけにする。

まずは、野菜をはさみで切り鍋の中に並べ、豚肉を適量入れ、水を入れて火にかける。十分くらいで沸騰してくるのでそこへ今回の目玉味噌を溶かしながら入れていく、ふたをしめて、さらに、十分くらい待つ。

十分後、……、

ふたを開け、味見をしてOKなら器によそい、完成  
!!!!!!  
「我ながらうまくそうにできたな」

味噌鍋を見ながら俺は言う、

「では、今日の俺お疲れ様!!」

「いただきます」

うまあ、冷えた体にしみるう

「そうだ。リンとなでしこに連絡してないじゃん!!」

急いで、スマホを取り出しメッセージを打ち込む

和也：リン、今なにしてる？

リン：やっと連絡きたな

和也：ごめんごめん。疲れすぎてて忘れてた

リン：なら仕方ない、どこのキャンプ場に行ってるの？

和也：亀淵オートキャンプ場ってところ。景色がきれいだよ

リン：へえ、確かに今調べてみたけど、いいところみた

いだね



## 第七話 味噌焼きおにぎりと帰宅

「ふぁーあ、寒。体が少しバキバキだ」

俺は開口そうそうそんなことを口走りながら、腕時計を見る。

「朝の6時45分か、寒いけどはやく出なきゃ」

眠い体に鞭を打って、テントの外に出る。

「よし、朝ごはんの味噌焼きおにぎりを作る準備をしますか」

すぐに、バーナーコンロと暖を取る焚き火を始める、……、

「ご飯を炊いてεーεー（\*ノ?ノ）いくぞー!! 飯盒に米を入れて水をはる。そして、バーナーコンロにかける。」

今回は、ご飯を先に作ってからおにぎりにして味噌を染み込ませ焼き上げる。

数分後、

「おっー! 飯はそろそろ頃合だな」

そう言いつつ飯盒の蓋をとり、ご飯を混ぜる。

「よし、こんなもんか」

「ご飯を混ぜ終わったら、おにぎりにしていく。」

「ざっと、朝ごはんにはちょうどいいくらいのに2個ができたな」

おにぎりを飯盒に合う大きさに作り終えたら、飯盒に握ったおにぎりを入れ、さらに味噌を入れていく。ほんの少し水を入れ、さらに5分ほど、バーナーにかける。

五分後、、、

「おお〜！」

俺は、飯盒の蓋をとりおにぎりの形が崩れないか確認する。

「うん。上手くいったようだな。完全に水分が飛ばずにいい具合で残ってるな」

そう言いながら、おにぎりを取り出し紙皿に盛る。

スマホをすかさず取り出し、写真を撮る。パシヤリ！ ΣPw・・)

「リンとかは、起きてるのかな？」

手元の腕時計を確認する。。。。。

午前7時15分、、、起きてなさそうな感じがしただけど、連絡を入れたいて損はないな。なでしこにも連絡しとくか。。。。

和也：おはよー!!朝はやくごめんなあ。俺は、これからご飯を食べるところだぜ!

写真を送るわ

そうメッセージを送った後にさつき作り写真を撮った味噌焼きおにぎりを送る。

リン：和也おはよう。朝から、作る根性があるなんてスゴ

和也：いやいや、すごい簡単なものだからな。リンも試してみれば？何やかんやで作るの面白かったよ

リン・和也。思った以上にソロキャンをより満喫してる気がする。やっぱり、遠出は、楽しい？

和也：楽しいっっちゃ楽しいんだけど、やっぱりなんか物足りないと思う自分があるんだよねあゝ

リン：和也でも、そんなこと思うんだ

和也：いやいや、俺をなんだと思ってる

リン：究極のアウトドアの化身

和也：き究極のアウトドアの化身って、人外かよ！俺そんな感じか？

リン：和也にすぐくあつてる言葉は、これしかない？（☒―☒）??

和也：まあ、リンよりも遠出とかキャンプ、挙句の果てには、サバゲーをやってるから返す言葉もねえ（〇）？、（〇）

リン：でも、和也がいたからキャンプも面白いよ。いきなりで悪いけど、はじめてキャンプした日を憶えてる？

和也：ああ。リンとこのおじいさんからいらぬキャンプ道具が送られてきて、そこへ俺が出くわして、リンをキャンプに誘ったのが始まりだったよね？

リン：そうそう。和也が目を輝かせて今のなでしこみたいにキャンプを誘ってきて、やってみようかなと思つたのが始まり

和也：あれから、リンと長いこと一緒にいるけど結構楽しいもん。

リン：私も和也と居れて楽しいけど、和也は、今も昔も変わらず人か疑いたくなるほど常人離れしてるから（・皿・）

和也：まあ、親が幼い頃から鍛えてくるからそれに適応してつたらこんなことになつちまつたけど、リンが気にしないで一緒に居てくれてたことに感謝してる。つとごめんなんか告白みたいになつた上に長時間話しちゃつて、すまん。

リン：いや、気にしないよ。私も和也と居れてよかつたつて思うもん

和也：そうか、それはよかつたよ！じゃあお互い、今日一日頑張ろうな！

リン：だな

そうして、メッセージをし終えた俺は、味噌焼きおにぎりを食べ始める。。。。。

「うんまあ、あと帰るだけだけどお土産でも買つていくかねえ〜」

父さん母さんとリンの家族となでしこ。。。。まあこんなもんだけど、あとで、市街地を抜ける前までにお土産を調べておこう。（。ー。）（。ー。）ウンウン

「よし、（）馳走様でしたψ（，♀☆）」

俺は、すぐさま片付けに入り、20分もかからずに全ての片付けを終えた。





「よし、着いた。じゃあ入店しますか」

「いらつしやいませ」

「すみません。栗きんとんつてありますか？」

「はい、ございますよ」

「じゃあ、栗きんとん。6箱ください」

「ありがとうございます!!」

俺は、会計を済まして店を出る。

「ありがとうございますー」

「よし、じゃあ帰るか。ここからが長いから気をつけるぞ!!」

バイクのエンジンをかけ、そう意気込む。

和也：父さん母さん今から帰るわd(´▽´\*)

勝人：おお。和也おはよう！気をつけて帰ってこい！

あかり：ほんとに気をつけてね。

和也：わかってるって、あ！後土産買ったから楽しみにしてて！

あかり：わかったわ。楽しみにしてる。

よし、これでいいな。では出発!!!

数時間後、日も暮れて夜8時になろうとしているぐらいの頃に俺は、家のすぐ近くまで帰って来れた。

「いやあ。体がバキバキになった。そして疲れたあ」(？ω？)「 $\angle$ 」  
 おつやつと家が見えた。

「ラストオー」

キキーイ、ブルンブルン

「ふう。やつと着いたぜ！」

そうしてすぐに、母さんと父さんか玄関から出てきた。。。

「ただいま！」

「おかえりなさい」(\*、艸、\*)

「あつ、岐阜のお土産つてこれだよ。 $\angle$  (  $\boxtimes$  —  $\boxtimes$  ) / 栗きんとんです」

「家で食べる用と、リンの家用、後と友達用を買ってきたから、明日渡すよ」

「あら、栗きんとんなんていいわね！じゃあ遅い時間だけど栗きんとんを食べましょ。夜だから少しだけね」

「分かった。父さんと手を洗ってきますー」

「和也、今回はどうだった？」

「結構楽しかったよ。一人で長距離を移動するのはいいけどやっぱり、みんなでやるのもいいかなって思うキャンプだったよ」

「そうか、それはよかった。じゃあ、リビングに行くか！母さんが待ちくたびれてしまうかもしれないからな」

「だね」

あれから、家族全員で栗きんとんを食べながら今回の岐阜での出来事などを話しながら、長い一日のソロキャンプを終えた。。。。。。。